



世界の中心に『恐怖』がある。

金融業で世間を渡っていくのは並大抵の努力では追いつかない、と生前、父は口を酸っぱくして僕に何度も話した。祖父の手伝いとして金融会社に勤めていた父は、連日深夜に帰宅しては、酒を浴びるように飲んでいった。

母は僕が物心ついた時には、もう父を忘れた存在として扱っており、二人の中は冷え切っていた。僕はこっそりと夜中に起きだして、酒を飲んで涙を流す父に寄り添った。父が好きだという部分もあるが、僕は父が話す苦勞話が好きだった。

平凡な小学生が知らない、世間の荒波はおとぎ話のように非現実で僕は空想をかきたてられた。

お金を返せなくなって首を吊った社長さん、借金のために身体を売ったお姉さん、財政難で心中した一家、取り立てが出来なくて上司に土下座させられた同僚、うまく巨額の借金をさせることに情熱を燃やす祖父、いきなり刃物を振り回した中年のおじさん、色んな人物が父の話には登場した。僕は、胸をときめかせながら聞いた。

平和に暮らしている僕には想像も出来ない人生を送っている人々が、同じ世界に存在している。まさに究極のファンタジーだ。そこにある恐怖など、幼い僕には理解できなかった。

子供だった僕が成長して詰襟の制服を着るようになった頃、父が消費者金融の会社に勤めており、父方の祖父が社長であることを理解した。父はさらにやつれて、目の下にくまが出来たが、母は父を無視し続けた。

さらに僕が長じて高校のブレザーに腕を通すようになった頃、父は死んだ。交通事故に遭い、病院に到着する前にあっさりとしてしまった。事故の過失は相手にあるとされ、僕らは巨額の慰謝料を受け取った。

社員ではなく身内だからといって、祖父は母に対して父の退職金を払わず、慰謝料だけを受け取らせた。母は泣きもせず、文句も言わなかった。

ただ、やけに晴れ晴れとした顔で僕に微笑みかけた。

「建彦、これで解放されたわ。私たちはやっと監獄の檻から脱出できたのよ」

父が死んでから、母は生き返ったように若がり明るい性格になった。巨額の慰謝料は今後の生活を

送るには十分すぎるほどの額で、母は働かなくても生活に困らなくなり、解放感からか毎日のようにカルチャースクールに通い、社交ダンスできわどいドレスを着て踊るようになった。僕は社交的になり、はしゃぐ母を遠くから見つめた。

物理的には同じ家に住んでいたのだから近くにいたのだが、人生を謳歌する母の桃色な頬は僕にはあまり馴染めないものだった。

目の下が黒くなり、頬がこけ、顔色がいつも青く、幽霊みたいに夜にしか会えない父のほうが僕は好きだった。この世の不幸は全て自分が背負っているのだと言わんばかりの父の話と顔。日本酒を飲み干す度に漏れる生臭い吐息、不潔な毛髪、皺だらけの手のひら。

僕はうっとりとした気分で父を眺めていたものだ。今となっては何もかもが懐かしい。

交通事故で父は呆気なく死んだが、本当に相手側の過失であったかどうか僕は納得していない。

病院で出会った相手の若い男は目がせわしなく動き、大量の脂汗を流して、怯えていた。人を殺してしまった恐怖ではなく、何者かに追い詰められている恐怖を僕は男から感じたのだ。母に話すと、気のせいだと言われたが、僕は人の恐怖を感じ取れる。

小学校の頃から、僕は恐怖というものに敏感だった。誰が誰を恐れ、誰が何を恐れるのか手に取るように分かるのだ。

僕は恐怖というものを誰よりも理解している。

どんな人よりも、どんな事柄よりも、恐怖は常に僕の傍にあった。

たとえば、体格が大きく弱い者いじめが大好きな健二をみんなより成長の遅い裕介は恐れていた。健二は体育教師の浜中を恐れていた。彼は暴力を平気で振るい、親や他の教師に話した生徒はもっと酷い目に遭わされるからだ。

浜中は教頭を恐れていた。教頭は浜中が公務員でありながら、ギャンブルで借金していることを知っていた。もし、暴露されたら浜中は間違いなく退職することになるだろう。教頭の前では、浜中は礼儀正しく振る舞うが、他の教師の前では横柄だった。

教頭は音楽教師の水谷百合子を恐れていた。彼女と不倫していたからである。自分の家庭と立場を守りたいが、百合子と別れることも出来ず、彼女の言いなりだった。

そして水谷百合子は僕を恐れた。僕が彼女と教頭の不倫現場を目撃し、激写したからである。音楽室での密会を学校や保護者側に知られれば彼女は職を失ってしまう。

そして彼女には教頭の他に男がおり、男に教頭と不倫していることを知られたら殺されると呟いていた。

「返しなさい。写真を返しなさい」

最初、写真を見せた時、水谷百合子は真っ青な顔で僕に詰め寄った。甘い香水の香りがした。初めて嗅ぐ女性の香りは僕の鼻孔を刺激し、嬉しさと同時に不愉快さが印象として残った。

名前と同じ水色のスーツに白いシャツが清潔な印象で、写真の中にいるみだらな女の影はどこにもない。

「写真は僕のカメラで撮ったのですから先生のものではなく、僕のもんです。返すという言い方は間違っていますか」

やんわりと間違いを訂正すると、百合子の顔は青ではなく赤になった。

「生意気言ってんじゃないわよ！いいから寄せさせてのよ、このクソガキ！ガキのくせにあたしをゆるる気じゃないでしょうね？」

清楚な音楽教師の仮面が剥がれ、現れたのは金と男に執着する醜い女の顔だった。正直、うんざりした。子ども相手に翻弄される様子は無様で滑稽で、顔も行動も最悪に醜い。

「写真、ネットで流しましょうか。今、クラスでパソコンの授業があるんです、他校の生徒と触れ合おうということで、学級ホームページを開設したんですよ。その掲示板に貼り付けたら面白いことが起きるでしょうね」

僕の一言で決着はついた。その日から水谷百合子は僕を恐れるようになった。一連の恐怖の流れと理由は、僕は水谷百合子から聞き出した。

とても面白い話ばかりで僕は小学校を退屈せずに過ごすことが出来た。僕を恐れる水谷百合子は教頭に注意を促し、教頭は浜中に僕に手を出さないように言い聞かせ、浜中は健二が僕にちょっかいを出さないように殴りつけた。

ピラミッドの頂点が決まり、食物連鎖のように順番が決まっていく様子を、僕は遠くから眺めて楽しんだ。お礼に水谷百合子の写真は卒業までばらさずにおいた。

卒業式の日水谷百合子は必死に僕に接近しようとしたが、僕はわざと逃げ、彼女の反応を楽しんだ。卒業式の翌日、僕はまだ開いたままの学級ホームページに密会の写真を載せ、小学校時代に集めた浜中・教頭・健二の暴力をふるう写真、ギャンブルを楽しんでいる写真、みだらな真似をしている写真を大量に載せた。

一週間後に水谷百合子の撲殺死体が発見され、さらに二日後に教頭が自殺し、浜中が首になったと新聞で知った。健二は問題のある生徒として、中学校で要監視対象となった。

近所の中学に進学したので、時々街で顔を合わせることがあったが健二はいつも決まって逃げ出した。彼が僕に怯えているのがよく分かった。

彼らは恐怖に打ち勝てずに自らを滅ぼしたのだ。誰も恐怖には勝てない。

有名な大学に進学し、今年の春で僕は大学三年生になった。

母が爪のマニキュアをいじりながら

「そろそろ就職先を考えないとね。何かやりたいことはないの？」

大きく胸元が開いた高級ブランドのドレスを、だらしなく着崩している母が聞いてきた。皮のソファの上で濃い化粧をしたまま寝そべっている姿はトドのようだ。イタリア製のソファも、もう少しまともな場所に買い取られたかっただろうに。僕は同情した。

「特に考えてないよ。興味が湧くものもないしね」

「せっかく、いい大学に入ったんだもの。高給取りにならなきゃ損よ。そうねえ、あんた今の成績で、今の大学なら政治家にだってなれちゃうんじゃないの？コネがある先輩とか教授とか探せばいるでしょ」

金の話になると、母は嬉しそうな声を出す。父が活着ている時には決して出さなかった声だ。

「あんた、また部屋の電気を点けっぱなしで寝てたでしょ」

「暗いと眠りにくいんだ」

「ふふ、身体が大きくなっても子どもからの癖は直らないのね。お風呂も明るいうちに入るしねえ、彼女に嫌がられないの？」

下世話な笑みを漏らす母に僕は答えず、軽く肩をすくめてみせた。

父が死んだ直後の母はカルチャースクールに通い、日々のささやかな幸せを楽しむ、普通の主婦でしかなかった。

大量に入って来た金が母を変えたのだろうか、次第に母は乱れた生活をするようになった。どこかでひっかけてきた若い男を家に連れ込み、高いブランドの服を買いあさり、家を新築して家具は全て母の好みで統一された。

幼い日に住んでいた古い家と家具は文字通り消え失せた。父の物は全てゴミになった。僕が持っている一枚の写真だけが、父の形見であることを母は知らないだろう。

お世辞にもセンスがいいとは言えない母の服の趣味や、母が注文して造らせた家は僕が住むには息苦しい。

家を出ようかとも思ったが、面倒でまだ実行に移せないでいる。特に家を今すぐに出る理由もないし、無駄に金を使う気にもなれない。子どもじみているが、本当はあまり一人になりたくなかった。誰もいない空間に耐えられないのだ。

ぼんやりとしているうちに時ばかりが過ぎて行く。

新しい家には仏壇がないので、父の命日に手を合わせるとなると市内にある墓まで出向かなければならなかった。母は父の命日など忘れたようで、男漁りをしに出かけて行った。僕としては、詮索好きの母がいない方が気軽に出かけられるので好都合だ。

僕は毎年欠かさず、父の墓参りをする。一族共有の墓でひっそりと眠っている。哀れで不幸で、生きた証がどこにもない男。それが父だ。

『継谷家』とだけ書かれた墓石に僕は水をかける。命日だというのに、僕以外の親族の姿はない。父は完全に世界から忘れ去られた存在になった。

墓地は広く、墓石が点々と置かれている。今日は快晴で、五月の風が頬に心地よい。僕以外に人はおらず、のんびりとした気持ちで墓と向き合う。

父が死んで十年以上が経つが、僕は未だに父以上に不幸に取りつかれた顔の人間を見たことがない。どこかにいるはずの不幸な人間に思いをはせるが、すぐに父の顔が浮かんでしまう。

考え事をしていたので、僕は背後から人が近づいてきていることに気がつかなかった。

ひゅう、ひゅう、と風が鳴るような音がして深緑色の着物を着た老人が、僕の方を見ている。禿頭に切れ長の瞳、強欲そうな鷲鼻、酷薄そうな薄い唇。皺は顔に刻まれた傷のようだ。

「千次には似んとええ顔じゃ。建彦やな？」

地の底から響くような低音の落ち着いた声が僕を威圧する。

「確かに僕の父は千次という名前で、僕は継谷建彦ですが。どなた様ですか」

「継谷 殊彦（ことひこ）いうても分からんやろなあ。千次の親父いうたら分かるやろ」

僕は目を見開いて、目の前の老人を見た。老人は皺こそあるが、しっかりとした足取りで立っているし、話し方も張りがある。年よりにしては精力的なエネルギーが溢れている。

「僕のおじいさんですか。初めまして」

身内に対して随分とよそよそしい挨拶だと自分でも思ったが、僕は祖父に会うのは生まれて初めてで、いい年になっている分だけ、すぐに家族とは思えない。

「おう、ええのお。千次よりどっしりしとる。お前、明日からうちに来るんやで。うちの仕事をしっかり覚えてもらわんとなあ」

「うち？会社のことですか？僕はまだ就職先は決めていないのですが」

老人が強引に僕を就職させようとする意志を示したので、僕は慌てた。父と同じ道を歩むことなど考えたことすらない。

「お前ならずぐ、うちに馴染むわ。間違いない」

うっくっくっと笑う老人の姿は、妖怪のように不気味だった。

名刺を墓石の上に置くと老人は踵を返して帰って行ってしまった。自分の息子の墓に、花を飾るつもりも水をかけてやるつもりも、線香をあげるつもりもないらしい。

帰宅すると、僕は祖父の置いていった名刺を母に見せた。

「明日から来いって言われたよ。唐突すぎるよね」

返事がないので振り返ると、シャンパンを持つ手が震えていた。僕は飲みかけのコーヒーを一旦、キッチンに置いた。

母の顔は真っ青になり、唇を強く噛みしめている。全身が震え、シャンパンがついにグラスからこぼれた。

「何で？何でこんな名刺をもらったの？あんた、まさかこいつに会いに行ったの？」

こいつ。母は祖父を相当嫌いらしい。僕が一度も祖父と会う機会がなかったのは、母と不仲だったせいなのだろうか。なぜ、不仲なのだろう。

「違うよ。父さんの墓参りをしたら、いきなり現れたんだ。墓参りしに来たわけじゃなかったみたいだけどね」

仕方ないので、僕は父の墓参りに行ったことを正直に話した。父が死んで以来、父の話題は禁句のようになっていた。

母はショックを受けたらしく、しばらく黙りこんだ。僕が父のことを、すっかり忘れていたのだとしたら、自分に都合よく考えすぎだ。

「そう、墓参りに行ってきたの。あんた、好きだったもんね、あいつのこと」

あいつ。父でもあなたでもなく、あいつ。なぜ結婚したのか不思議なぐらい、母は父が嫌いみたいだ。こいつとあいつ。母は父に関する全てが嫌なのかもしれない。

冷めたコーヒーを僕は口にした。ひどく苦い。

「どうするの？行くの？」

苦い味が、じわじわと口に広がっていく。

「一応、行くよ。断るなら断るで会わなきゃいけないことに変わらないからね」

母の思いつめた、悲しみをたたえた瞳が僕を見ている。

「あんた、帰ってこられなくなるかもしれないわよ。お父さんを見てたでしょ、あそこに行くってことはそういうことなの。行くと後悔するわよ」

警告だ、母が僕に警告している。口の中に残る苦さよりも、さらに苦い感情が込み上げてくる。

「おおげさだよ、母さん。大丈夫、明日は断りに行くだけで入社なんかしないよ、興味ないしね」

母は険しい顔で僕をじっと見つめた。ただならぬ気配が母からしている。

「あそこはね地獄の入口なの」

地獄の方がましかもね。母は力なく呟くと寝室へ消えた。僕はぼんやりと名刺を見た。父は祖父が造った地獄へ落ちたのだろうか。

次の日、僕は名刺に書いてある住所を訪ねた。都心の中心部、大通り沿いに天まで届くかと思うようなビルがあり、二十～三十階に祖父が社長を務める消費者金融の名前が記されている。

正直、緊張はしていなかった。務める気もないし、横柄な祖父相手に気後れもしていない。軽く社会見学をするつもりで僕はエレベーターから降りた。

降りると目の前にすぐ受付があり、緑が規則正しく配置され、制服を着た若い女性社員も飾り付けてある。

胸の大きさが制服の上からでも分かる化粧の濃い女が僕を見ると、受付から出てきた。

「社長からお話は伺っております、こちらどうぞ」

にっこりとほほ笑む女からは、水谷百合子とは違う香水が漂っている。甘い香りはまた僕の鼻孔を刺激したが、やはり不愉快な気持ちになった。

受付からすぐの場所にドアがあり、女が名札に付いているカードをスキャンすると音もなく開いた。左は窓がずっと続いており、右はドアが一行に並んでいる。そのうちのひとつが開き、仕立ての良いスーツを着た恰幅の良い中年男が大股で歩いてきた。

「ああ、君、ご苦労。さ、建彦君。社長がお待ちかねだよ」

女は一礼すると受付へ戻っていく。どうやら中には入れないようだ。ドアが閉まり、内側から見るとかなり頑丈そうなドアであることに気がついた。随分と防犯対策に力を入れているようだ。何か物騒な理由でもあるのだろうか。

「僕は山中 重蔵。社長の秘書をされていてね、お父さんとは一緒に働いていたんだよ」

やけに馴れ馴れしく、また幼い子供に話しかけるような山中に僕は苛立ちを感じた。成人している人間に向かって子ども扱いするとは、きっと山中は馬鹿なのだろう。

「父はどうでしたか？仕事ができる方でしたか？」

意地悪で、僕は答えにくい質問をしてやる。父の愚痴を聞く分には、父は仕事が出来なかったようだ。案の定、山中は言葉につまって鼻をかいた。正直な男だ。

「僕の先輩秘書でね、社長に重宝されていたよ」

重宝されていた割には墓参りもしなかった。心の中で反論して、僕は表面だけ満足そうに笑ってみせると、山中は安心したのか笑顔になった。

「さあさあ、社長のところへ行こう」

べたべたと肩を触られるのには閉口したが、今日限りの相手に文句を言って仕方ない。僕は我慢した。

長い廊下は真っ赤な絨毯が敷き詰められており、足音を全て吸収する。各部署のプレートがドアに張られており、無駄な装飾が悪趣味だ。

消費者金融の会社に入ったのは初めてだが、よその会社もここまで飾り付けているとは思えない。会社というよりは、富豪の屋敷に迷い込んだみたいだ。僕の視線に気がついたのか、山中が嬉しそうに辺りを見回す。

「社長は安く見られたらあかんって言って、インテリアを徹底的に飾り付けたんだ。おかげさまで働く方は楽しいよ、まるで大金持ちになったみたいだし、快適だしね」

「悪趣味ですけどね」

ぱっさりと言い切った僕に山中は大変驚いたらしく、足を止めた。丸眼鏡の奥の瞳がうろうろしている。

怯えている。僕にはすぐ分かる。社長がそんなに怖いのだろうか。

「早く行きませんか。僕はこの後、予定があるので」

予定などないが、さっさと話をして帰りたかった。山中はばね人形のように飛び上がって、再び僕を廊下の奥へと案内し始めたが、滝のような汗が流れている。よほど小心者らしく、まだ動揺している。この男にはうんざりしたので、山中が足を止めて「ここです」と言った時にはほっとした。

ドアをノックしようとして山中が腕を上げた瞬間、勢いよくドアが開き、真黒なスーツを着た継谷 殊彦が立っていた。

「よお来た、よお来た！山中、特別室用意してるな？」

「用意は万全です」

不思議なことに緊張が少しほぐれたのか、山中はゆったりとした笑みを見せた。

「こっちや、建彦。お前にうちの会社を教えたるで」

老人とは思えない力で、継谷 殊彦は僕の腕を掴んで廊下の最奥へ連れて行く。
指紋認証で入るドアに目を丸くしていると、ソファに座らされた。

「今から客が来るけど、一言も話したらあかんで。聞いて見るだけや、ええな」

僕の返事を聞かずに山中に合図をしたので、僕はため息をついて部屋を眺めた。

黒の皮張りソファの応接セットだけしか部屋にはない。山中が壁際に立っているのが、この部屋の唯一のインテリアかもしれない。窓は僕の背後にあり、ブラインドが降りているために、昼間だというのに薄暗い。

これから何が行われるのか分からないが、山中は先ほどより落ち着いて見える。よく観察してみると、小さな目に狡賢そうな光がある。

ドアが開いて、皺くちゃになったスーツを着た中年男が入って来た。背後に黒い服の男が見えたので、連れて来られたようだ。おどおどしており、瞳には確かに恐怖の色が見える。

男は無精ひげが生えていて、髪からは不潔な香りがした。頬はげっそりとしていて、唇がやけに渴いている。

「はよ座りい」

低い声で継谷が命じる。まさに命令したという言い方が相応しい。男は怯えた動物のように、そろそろとソファに浅く腰かけた。

「金は？」

「もう少しだけ、本当に少しだけでも」

「金は？」

「あの、あと少し待ってもらえ」

「金は？」

男は黙り込んだ。唾を飲み込む音が室内に響く。

「か、家族がいるんです。このままだと路頭にまよ」

「金を返せへんなら死ね」

僕は耳を疑った。死ね？この老人は死ねと言ったのか？

「待ってください」

「死ね」

「お願いで」

「死ね」

「助けてく」

「死ね」

「本当にあとすこ」

「死ね」

死ねという言葉だけが繰り返される。まるで機械のように継谷は同じ言葉しか発しない。

「お前なんぞ死ね。家族巻き込んでよ死ね、死ね。死ね」

ゆっくりとした口調で語りかけるように、継谷が呪いの言葉を吐く。言葉で抵抗する気力も失せたらしい男は、うつろな目で正面を見ている。

「死ねば金も返せるやろ。ほら、死ね」

呪われた会話はそこで終了した。

来たときと同じように黒い服の男に抱えられながら、無精ひげの男は帰って行った。

「これがうちの仕事や。金を貸す、貸した金を返してもらう、その繰り返しやな。たまにああやって返さへん奴がおるから苦労するわ」

からからと継谷が笑い、横で山中も笑っている。

まともな商売じゃない、僕は漠然と苦労している父の姿を想像していた。

家に帰ると、灯りが点いていない。母はまだ帰宅していないのだろう。

僕は鍵を開けて中に入り、まずリビングに灯りを点けようとして動きを止めた。

母が大量の酒びんと一緒に床に倒れていた。

「母さん？」

屈みこんで呼んでみたが、母は返事をしない。

「母さん！」

もう一度、大きな声で呼んだが母は動かない。うつ伏せになっている身体を起こすと、舌をだらりと垂らしている顔が目に入った。

脈をとらなくても、母が死んでいるのが分かった。首に細い紐が、蛇のように巻きついていた。

喪服に身を包み、僕は座敷の奥に座っている。

母は自殺した。大量の酒を飲み、自分の首を絞めて死んだ。酒を飲んでの過失では考えられないほど、母の首は赤黒く変色し、ありったけの力を込めたのがうかがえた。

なぜ、自殺したのか。

警察に聞かれても僕にはまるで心当たりがなかった。母はいきなり死んだ。

高級のインテリアや衣服に囲まれ、自由気ままに男を取り替え、人生を楽しんでいたはずなのに。自殺する理由などどこにも見当たらない。

悲しみよりも驚きの方が強く、さらに言えば謎めいた死の方が気になった。

母には友人と呼べるような人はおらず、親類に報せを送ろうとしたが、家中探しても自分の親族に関

係する物は見当たらなかった。仕方ないので、祖父にだけ報せを送り、僕だけが母を見送ることとなった。

出席者がいないので葬式はない。今座っている座敷は火葬場の横に用意された部屋で、母が燃えていくのを待っている。

母は孤独な人だったらしく、アルバムにあるのは僕との写真か、若い男との写真だけしかなかった。学生時代や今より若い時分の写真は一切なく、僕は永遠に母の両親や出生地や、青春の話や、父との馴れ初めを知ることが出来なくなった。

聞いておけばよかった、という後悔の念は起こらず、ただ不思議な思いがした。

まるで過去を消してしまったみたいだ。母は、過去から逃れようとするように、何もかも語らず残さず死んだ。

何が過去にあったのか、なぜ死ぬほどに絶望したのか。何に絶望したというのか。

ひとりで座敷に座って考え事をしていると、暗くて湿ったものが身体に張りついてくる気がして気持ち悪くなった。

どかどかと足音がして、僕は顔を上げた。

「おう、建彦。清実は骨になったか」

遠慮なく襖が開けられ、萌黄色の着物を着た継谷が立っていた。座敷へずかずかと上がり込んで来る。母を弔いに来たとは思えない、横柄な態度だ。

「その女の骨は間違ってもうちの墓に入れたらあかん。そいつは、借金の代わりに貰ってきたもんや」

鈍い音が頭の中でした。

「知らなかったんか？清実は千次に辛う当たってたやろ？あれはな、恨みがあったからや。あいつの両親が金返さへん言うから娘貰て、身体で稼がせて返済させたんやで」

母が過去を消したい理由を、僕はようやく理解した。今のご時世で身売りして借金を返済させられたなんて、考えられない。時代が違う。

「年取って稼がれへんようになったから、いつまでも結婚せえへん千次の嫁にしたんや。千次はひとり息子のくせに、なかなかわしの後継ぎを作らんで困ってたんや」

いやらしい顔で継谷が僕の顔を覗き込んでくる。狡猾で残忍で、狂気めいた空気がこの男から漂っていて、息苦しいほどだ。

「ここからが面白い話やで、後継ぎを千次は作らんかったんやのうて、作られへんかったんや。あいつは種なしやったんや、わしの息子のくせにだらしない」

種なし？じゃあ、僕は。

「清実かて産みたくても産めへんちゅうわけや。せやからわしが種をやったんや。建彦、お前はわしの息子や、千次は父親のうて年の離れた兄や」

叫びださないのが自分でも不思議なぐらい、僕の感情は爆発して入り乱れた。

こんな汚らしい屑が自分の父親？父は僕の兄？母が売春？

母が父を嫌う理由も、母が死んだ理由も全てがこの忌まわしい過去にあったのだ。

僕に真実を知られることを恐れて母は死んでしまった。憎い男の血を引いていた僕に優しくった母は、もういない。

「父は、千次は何と言っていたのですか？」

遠くで自分の声がする。

「あいつは意気地なしやから、わしの言いなりやった。死ぬ時も、あっさり死におったで。借金の取り立てに失敗したから死ね言うたら、ほんまに死んだんや。おかげさんで金は手に入ったんやから、大したもんやで」

交通事故で父は死んだ。相手の過失で起きた事故のはずだ。今の言い方では、まるで父は望んで死んだみたいではないか。

僕の顔は露骨に歪んでいたのだろう、継谷が意地悪い笑みを浮かべる。

「お前が考えた通りや、相手の男に借金の代わりに死ね言うて暴走運転させたところへ千次を突っ込ませたんや。山中が男にルートを指示させてなあ」

悪魔のような犯罪を、継谷は淡々と話す。

「いいんですか？僕にそんな話をして。僕が警察に話すかもしれませんよ」

「お前は話さへん。見れば分かるんや。お前はわしによう似とる。顔だけやない、中身もや。こんな話されても、お前は眉ひとつ動かさへん」

父と母の秘密を話され、おぞましい犯罪を聞かされても、僕は取り乱しもせずに正座している。この男の言う通り、僕は血の通っていない人間なのかもしれない。

継谷 殊彦という悪魔の血をひいた者に相応しい冷酷さを、僕は持っている。

それは、今の僕の態度が証明してしまった。

「ええか、お前も気がついたやろうがうちは普通の消費者金融やない。いわゆる闇金融や。でも、まだお上は気付いてへん、これから先も気づかせるつもりはない。そのためには鉄の精神が必要なんや、わしとお前のような」

継谷は芝居かかった間を置いた。

「お前はわしの後継ぎに相応しい冷酷さがある。これからわしが鍛えて立派な社長に育ててやるから安心せえ」

うっくっく、と喉にこもる笑いを漏らして、継谷は僕の前から去った。

母の骨と共に僕は帰宅した。出迎えてくれる人はなく、僕は軽くなった母をリビングのテーブルに置いた。真っ暗な家は不気味で寒気がする。

家から出たくなかったが、他に行くあてがないので仕方なく僕は家の中に足を踏み入れる。ひやりとした冷気が頬を刺し、余計に気が滅入り、誰もいない空間に恐怖を感じる。

だから、ひとりになりたくなかったのに。

死体が転がっていた床はハウスクリーニングに頼んで綺麗にしてもらい、今では惨劇の痕跡はどこにもない。母が残していった大量の服と家具は近いうちに売りに出すか、捨てるしかないだろう。僕には使えないものばかりだ。

深い沈黙が僕を包み込む。目をつむると闇が広がる。

呪われた血、母の秘密、父の過去、葬られた罪。

父はずっと違法な仕事に携わり、神経を病んだ。母は身売りをさせた男の息子を憎んだ。僕だけが何も知らずに生きていた。

それは罪か？

否、罪ではない。僕の罪とは何か。

のろのろと這いずるようにして、僕は洗面所へ向かう。母が愛用していた大きな鏡に僕の顔が映る。僕は自分の顔をよく知らない。

風呂に入る時も、洗顔する時も、身支度をする時も、極力鏡を見ないようにしているからだ。そうやって今まで生きてきた。

切れ長の瞳、強欲そうな鷹鼻、酷薄そうな薄い唇。これが僕の顔だ。父にも母にも似ていない。父はもっと優しい目をしていたし、母はぷっくりとした唇が自慢だった。

僕の顔は継谷 殊彦にどうしようもなく似ている。

僕の罪は、あの男に似たことだ。

日に日に、自分の父親の顔に似てくる僕を見て、父は何を考えていたのだろうか。

鈍い痛みが頭を襲う。鋭さをもつ痛みになるには、記憶は遠く曖昧でしかない。

深夜の父の晩酌に付き添うのが僕の楽しみだった。怖いおとぎ話を聞いているようで、胸がときめいた。

開けてはいけない記憶の扉がゆっくりと、軋みながら開こうとしている。

疲れ切った父の顔を見ながら僕は笑っている。

この扉を開けたら、きっと僕はもう戻れない。

「あんた、帰ってこられなくなるかもしれないわよ。お父さんを見てたでしょ、あそこに行くってことはそういうことなの。行くと後悔するわよ」

父が僕を見ている。僕の唇が動く。

『あそこは地獄の入り口なの』

記憶がゆっくりと蘇って来る。

疲れ切った父がコップにビールを注いでいる。幼い僕にはビールが何なのかよく分からなかったが、父がいつも飲んでいるから疲れに効くものだと思っていた。

「また親父に言われちゃったよ。お前は死ね、死ね死ねってさ。あの人は金が全てで、利益になるなら人が死ぬことも厭わないんだよ。死ね、死ね、死ねってさあ」

僕は言葉を覚えるのが遅い子供だったと母が言っていた。だから自然に父がよく話す言葉を覚えてしまった。意味も知らずに。

「お父さん、どうすればいいかなあ？建彦、お父さん死ねばいいのかな？死ね、死ね、死ねってみんな言うんだ」

たとえ、自分の子でなくても父は僕に優しくかった。毎晩のように自分にじゃれついてくるのが嬉しかったのだろう。彼とまともに話す人はいなかったようだから。孤独な男の唯一の話し相手が僕だった。

僕は意味の知らない言葉を口にする。父の動きが止まり、そして笑顔になる。

「そうか、そうだよなあ。うん、父さんもそう思うよ。建彦」

建彦。

僕の名を呼んだ父の声が遠くなる。

それきり、父さんは二度と僕の名を呼べなくなった。

父の葬式にはたくさんの方が来ていたが、誰も泣いていなかった。遺影の前で笑い話、世間話。自分が主役のはずの葬式ですら父は忘れられた存在だった。

でも僕は聞いた。棺に耳を当てて聞いたのだ。

『ほおう』

喉から抜ける風のような音が父から聞こえた。
ああ、泣いている。父が泣いている。

顔を上げて、真っ暗な闇に立つ自分を見た。鏡の中の僕は、自分でも驚くぐらい無表情だ。

『ほおう』

父の音がする。僕の耳元で父の音が――

鏡を見ると、僕の背中に張りついた父がいた。

「父さん」

声が震えているのが分かる。

『ほおう』

父の眼は固く閉じられ、血の涙を流している。僕の両肩に青白い手がしがみつくように乗っていた。
口だけが微かに動いている。

『ほおう』

冷たい感触が背中から伝わって来る。

『ほおう』

足元には口から血を流した母がしがみついている。やはり目は固く閉じられている。
どうして僕の元に？僕が罪人だからなのか？

「僕は、僕は」

恐怖、僕がそれを人より敏感に察知出来るのは僕が恐怖というものをよく知っているからだ。

「ごめん、父さん。許して、あんなことになるなんて思わなかったんだ。僕は知らなかった、僕は」

『ほおう』

頬に冷たい感触がする。父が僕の顔に近づいてくる。

「父さん、やめてよ、違うんだ。僕は」

足を掴む母が僕を閉じた目で見上げてくる。

『ほおう』

二人の鳴き声がこだまする。

「違うんだ、殺す気なんかなかったんだ！」

「お父さん、どうすればいいかなあ？建彦、お父さん死ねばいいのかな？死ね、死ね、死ねってみんな言うんだ」

覚えてたの言葉をこどもが口にする。

『しね』

僕は床に沈みこんで泣いた。父と母の声がこだまする真っ暗な闇の中で、僕は泣き続けた。

山中はせかせかとした足取りで自宅への道を急いでいた。仕事が山積みで、最近ろくに家に帰っていないかったために、妻の機嫌がとても悪い。

今日は珍しく早目に帰宅出来たので、彼は花束を買って家へ向かっている。

裕福な家ばかりが立ち並ぶ高級住宅地の一等地に山中の家はある。自分が勤めている会社が違法だということは、入社する前から勤務している同学の先輩から聞いてしっていたが、給料が魅力的だった。金と正義なら、山中は迷わずに金を選ぶ。

さんざん悪事を働くことになり、叩けばいくらでも埃が出る身となったが、立派な家に住み、若い嫁と愛人を手に入れ、海外へいくらでも旅行出来る贅沢を考えれば大したことでなかった。

「山中さん」

夜道で突然、名前を呼ばれて山中は焦った。自分を殺してやりたいと思っている奴は両手、両足の指を使っても数えきれない。

「僕ですよ、そんなに驚かないでください」

電灯の下に継谷 建彦が立っていた。社長の隠し子だ。千次を殺す手伝いをした山中にとってはあまり相手にしたくないが、ゆくゆくは自分の上に立つ人物である。機嫌を損ねては将来に響く。

「ああ、建彦くん！どうしたんだい、こんな所で」

わざとらしいぐらいに、山中は弾んだ声を出した。

「実は祖父のことで、ご相談があって。会社に行けば祖父に知られてしまうと思って、失礼ながらここで待っていたんです」

以前のふてぶてしさはなく、継谷 建彦は若者らしい躊躇いを見せた。よほど悩んでいるようだ。

恩を売っておいて損する相手ではない。現社長亡きあと、会社の頂点に立つと思われる男に媚びを売っておくのは、山中にとって当然の行為である。取り入る技術だけで、山中はここまで出世したのだ。

「それじゃあ、どこか喫茶店にでも行こうか」

「あの、この道を抜けるとすぐ大通りに出るみたいなので、こちらから行きませんか。僕、この道を通

ってここまで来たんですよ」

住宅の間の狭い道を二人は抜けた。車が近い位置で走っており、強い風が容赦なく身体を煽って来る。高速道路が近いため、この直線道路はスピードを上げて走る車が多く、交通事故も頻繁に起きている。

「建彦くん、車に気をつけてね。ここは飛ばす奴が多くて」

「あなたが指示した男もスピードを出していたのじゃないかな、きっと」

ぎょっとして振り返ると、建彦はにっこりと笑っている。優しい顔のまま、建彦は山中の身体を突き飛ばした。

自分の身体がバランスを崩して道路へ落ちて行くのを、山中はスローモーションのように感じた。

『ほおう』

青白い千次の顔が目の前にあったと思った時には、山中の身体は宙を舞っていた。

黒い額縁の中で丸眼鏡をかけた男が笑っている。

黒い着物を着こんだ若い女はつまらなさそうに宙を見ており、涙を流す者はいなかった。腐った男やっ
たから当たり前やな、退屈な葬式に継谷はあくびをした。

若い嫁さんを後で呼び出しとこか、にやにやと卑しい笑いを浮かべたのが視界に入ったのか、未亡人
は目を逸らしてしまった。

「線香の香りが身体に染みつきそうです」

リムジンの後部座席に座りながら、建彦は困ったように笑った。

「清実に山中、馬鹿みたいにぼんぼん死におっぺお前も面倒で大変やろ」

ふふっと建彦が口元を緩める。

「山中のアホの代わりはいくらでもおる。お前専属の秘書は、美女を用意せんとなあ。はよ後継ぎを作
らなあかんで。一人産んでも出来そこないの場合もあるんや、千次みたいにな。その点、お前は合格や
」

「ありがとうございます」

黒いスーツに黒いネクタイを締めた建彦はいつもより、ぐっと大人びて見える。

継谷は満足げに何度も頷いた。山中の葬式に出席するよりも、今は目の前に居る自分の後継ぎを育てる
ことが彼にとって何よりも大切なことだった。

自宅に建彦を招き入れると、継谷は書斎へ向かった。今日は家に誰もいない。

建彦に会社の重要秘密書類を見せるつもりだからだ。会社の後ろにいる政治家の名前や、関係のある
暴力団、顧客リスト、重要な秘密は全て継谷ひとりで管理している。秘書である山中も、息子の千次も
誰も信用出来なかった。信用の前に二人は、継谷の眼から見て無能だった。

千次は小心者の役立たずで、山中は腹に一物隠している男だった。隙を見せたら、立場を逆転されか
ねない危険性を秘めていた。奴は平気で社長の座を乗っ取る神経の持ち主だったと、継谷は考えている
。

交通事故で死んでくれたのは幸運だった、自分がついている。継谷はにやにやと笑いを浮かべる。

清実が死んで、自分の後継ぎに欲しいと思っていた建彦も簡単に自分の手中に落ちた。全てが自分の思う通りに進んでいる、藤原道長の歌でも口ずさみたくなった瞬間、背後に足音がした。

「なんだ、建彦か」

『ほおう』

泣くような、呻くような声がして身体がズシリと重くなった。背中がやけに冷たい。

「なんだ、おい、建彦！来てくれ、建彦！」

「僕はここにいますよ」

冷静な顔で建彦が自分を見ている。

「今、変な声が」

「死ですら利益にしないといけないのですよね。あなたが死ねば、遺産が全て僕のものになって利益になります。それも莫大な利益に」

かあっと頭に血が昇り、継谷は叫んだ。

「あほう！お前みたいな小僧にわしが殺されるわけがないやろ！こっちは修羅場を何度もくぐってるんや！」

「あなたは恐怖を感じたことがありますか？死ぬような恐怖を。僕はあります、いつも、いつも僕の世界の中心には恐怖があるのです」

肉切り包丁を持った建彦が、うわ言を口走りながら近づいてくる。継谷は武器になるものを目で探して、灰皿をつかんだ。

「殺したる！わしの言いなりにならんのならころし」

『ほおう』

またおかしな声したが、微かに聞きおぼえがある声に継谷は凍りついた。

『ほおう』

背中に何かがある。ずしりと重さを感じる。

「なんでや、なんで今さら化けて出よるんや、わしは何百人に恨まれてもこんな、こんな経験したことなんか」

『ほおう』

泣いている、千次が泣いている。両肩に細い指が喰い込む感触がする。

「やめえええ、千次い！わしから離れんかああ！お前みたいなカスに殺されるわしやないいいい！」

半狂乱になって、継谷は書斎の本棚や暖炉に背中を激しくぶつけた。身体をぶつけているうちに、ぐるりと体勢が動き、本棚のガラスに姿が映った。

自分の背中に血の涙を流した千次が張りつている。固く閉じられた瞳がゆっくりと開いていく。

「せ、千次、わしを見るな！見んといてくれええええええ！」

何が恐ろしかったのかは分からない。だが、千次と目が合えば自分は帰ってこられない場所へ行くことになってしまうと継谷は本能的に感じた。

千次の眼がゆっくりと開く。

『ほおう』

泣いている声がした。

継谷 殊彦は発狂し自らを包丁で切り刻んで死んでいたのを孫の建彦が発見した。明らかに自傷行為と思われる傷跡が検死でも見つかったため、自殺として断定された。

継谷の会社の後を継いだのは、まだ年若い彼の孫である。

社長室の窓から建彦は地上を見下ろしていた。

「みんな死んだよ。父さん」

豪華な装丁の部屋は、やはり悪趣味で建彦は嫌だった。継谷の葬式から戻ったばかりの建彦は、線香の香りを漂わせている。

僕はずっと怖かった。自分の一言で父が死んだと思ったから。

いや、実際に僕の一言で父は死ぬ覚悟を決め、本当に死んでしまった。

僕はずっと恐怖に悩まされた。水谷百合子も教頭も浜中も健二も、僕の恐怖を和らげてはくれなかった。母ですらも。

ずっと恐怖が僕の傍にあった。

山中も継谷も少しは恐怖を味わっただろうか。僕が感じている恐怖を。

記憶の扉が軋みながら開く。

『ほおう』

すすり泣くような、呻くような声が喉から漏れるようにして出た。確かに父の遺体から漏れ出た音だった。

「父さん？」

幼い日の建彦は遺体の父を覗き込んだ。

『ほおう』

背中がずしりと重くなる。

父の遺体が消えている。建彦はゆっくりと鏡を見た。

安置されていた継谷 千次の遺体は煙のように消えてしまい、騒動になったがどこを探しても見つからなかった。

結局、遺体は発見出来ず空の骨壺が埋められた。

一背中が重い。ひんやりとした感触が背中から伝わって来る。

『ほおう』

毎晩のように自分にまとわりついてくる、憎い親の顔に似てくる子どもを誰が愛せようか。そんな聖人はいるはずがない。

『ほおう』

「許して、許してよ。父さん……怖いよう」

建彦は、子どものように窓に額をこすりつけて泣いた。怖くて、怖くて、どうしようもないほどの恐怖が身体の中から溢れてくる。

窓には黒いスーツを着た建彦が映っている。

背中には、十年前に消えた継谷 千次の遺体がへばりついていた。

『ほおう』

死者の呼び声

<http://p.booklog.jp/book/24193>

著者：森山

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/next7/profile>

表紙画像：戦場に猫〈いくさばにねこ〉様

<http://catinthedeath.web.fc2.com/index.html>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/24193>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/24193>